



この人に聞く——インタビュ・シリーズ（第八回）—— 斉藤 光悦  
 小高 賢氏 （歌の前の平等）

六月某日夕刻、神田神保町の喫茶「古瀬戸」。ここは、学生時代に僕がよく通っていた珈琲屋の支店だ。メニューをみるとブレンドが一杯七百円。ああ、高くなったなあ、あの頃はいくらだったっけ、なんて思いながら、インタビュの相手がやってくるのを待つ。ありや、ありや、どこかで見た顔がいるぞ、とよく見ると、隣の席に

は「チベットのなんとか」って本を書いた文化人類学者の中沢新一がおばさん相手に何か喋っている。向こうは覚えていないだろうけれど、僕は彼と酒を飲んだことがある。明治の学生だった頃、新宿のゴールデン街に友達と探検にでかけた。カウンターの向こうで何かネズミでも動くような音がしていた汚いバーで、僕らを学生とみて興味をもったのか彼が話しかけてきて、どんな小説を読んでいるんだと聞かれて柴田翔と答えたら、鼻で笑われたことをはつきりと覚えていて。あの頃はまだ、そんなに有名ではなかった彼も、今や押しも押されぬ立派な知識人である。それにしても「チベットの……」なんだっけ、と考えていると、店の中にはモーツァルトの交響曲四〇番が流れ出した。そうだ「チベットのモーツァルト」だ。作ったような話だが、これは事実。僕もそのあまりの偶然に驚いたくらいだったのだから。

そしてほどなく、写真で顔を覚えていた小高さんが、きよろきよろしながら店に入ってきた。約束の時刻ぴったり。やあやあ、という感じで軽い挨拶を交わし、それぞれ飲物を注文した。馬が合いそうだな、と心中ほくそえみながら、インタビュを開始した。

◇ ◇ ◇  
 「悪魔の誘い」

——月並みな質問ですが、短歌を始めたきっかけは。

小高 僕が歌を始めたのは、三十三歳と遅かったんです。大学を卒業してカメラのキャノンに就職、その後、講談社に入社して編集者になった。そして二十七歳の時、馬場（あき子）さんの『鬼の研究』に出会いました。この人に仕事を頼みたいな、って思って、ちょうどつてもあったので、彼女に会いに行ったら、妙に気が合って、編集者と著者という関係ではなく、たちまち友達風な関係になって一緒に遊ぶようになった。仕事場が近かったのでお茶に呼び出されたり、みんなで旅行に行ったりしてね。そうこうしているうち、あるとき馬場さんが、「私は、まひる野をやめて結社をつくる」って言うんですね。そのとき僕は、大胆不敵にも「馬場さん、あなたは文

章で飯が食えるんだから、いっそ短歌をやめたら」って言ったんですけど、まあそれはともかくとして、「結社をやる、って言うけど、結社って何人くらい必要なの」と聞いたら、「五十人くらいはいない」と。いま三十人はいるんだけど」って。僕の結婚の仲人も岩田正さんと馬場さんにやってもらったので、仲人の苦しみは子供同然である自分の苦しみ、ということ、「僕たち夫婦で名目だけでも会員になってあげます。会費も払います」って、言っちゃった。だから僕は「かりん」の創刊メンバーなんです。で、せっかくだから、歌をやってみないかって「悪魔の誘い」があり、また、実際に少し作ってみたのが褒められたりして、もしかしたら自分には短歌の才能が、っていうんで、短歌を始めたわけです。それが三十三歳のときで、最初に馬場さんに会ってから、五、六年経っていました。まったく内発的なものない、ひどい始め方でしょ。こういう普通とは違った入り方には、今でもコンプレックスを持っていますね。でも、歌を作ってみると不思議なもので、歌いたい、表現したいことが発見される。その意味では、悪魔の誘いをかけてきた馬場さんには感謝しています。

—— コンプレックスについて、もうすこし。

小高 三十三歳から始めているので、その時には妻も子供もいたし、相聞の歌がない。ナルシズムがない。最初から大人の歌を要求されていたわけです。短歌って、相聞と挽歌がいいでしょう。その相聞の部分が僕にはない。あと残されているのは挽歌だけです。

それと、おそく短歌を始めたので、早急に知識を身につけなければならなかった。だから、文献を集めたり、全歌集や選集をほとんど買って、それこそ受験勉強的に勉強した。そうやって短歌に関する

の教養目録を早急に身につけたんです。ですから、最初の四、五年はとくに、知が勝っちゃう歌になりやすかった。今でもあるけど、頭でつくるみたいなどころがあった。

—— 本当の歌詠みって？

—— 若書きの時代の、内からほとぼり出るようなナルシズム、ロマンティシズム、そういうものがないということなんです。ところで、世の中の、裏の汚い部分も職業柄追いかねなければならぬ、雑誌記者という散文屋さんが、短歌という世界に入ってくると、違和感みたいなものはありませんでしたか。

小高 というか、歌人が、とても不思議な人種だと思いましたね。当初は、金にもならないのに、なんで一首に血道あけてるんだろう。って。僕はどうしても、短歌を相対化する意識が働いてしまう。今でもそうです。結句でねばるべきところを、まあいいや、と適当に済ましてしまうところがないわけではない。それが、僕の歌の基本的な問題点だと思ってます。馬場さんにも、そのところはよく指摘されます。

僕はジャーナリズムにいますから、鳥瞰図を描くのは得意なんです。歌壇全体にしても、自分の歌についても、客観的には分かる、見える。見えるんだけれども、執着して執着して一首、というような本当の歌詠みには、永遠になれないんじゃないかなあ。

—— 「めぐりの小世界」

—— 『太郎坂』のあとがきに、「第一歌集以来、家族を中心としためぐりの小世界に自分の作品対象を据えてきた」とありますが、

それは何故ですか。

小高 僕は学生時代、マルクス主義文献を中心とする社会科学を勉強しました。わりと勉強好きだし、知識欲も旺盛ですから、資本論は全部読んでいますし、マルクス主義関連の文献はかなり読んでいました。

けれども、大学闘争があつたり、大学を卒業して社会に身を投じるなかで、目の前のものがごろごろ、ごろごろこわれていく。マルクス主義による世界観、世界把握というけれど、世の中そんなに単純なものじゃないな、っていうことを実感させられたわけです。頼むべきものがなくなってきたという実感ですね。それなら、この家族という小さい世界を拠点にしていく以外にないな、ということ。家族というめぐりに対象を据えてきたんです。短歌という形式はその意味で、生活をつねに確認させ、再生させてくれる役割を持っている。作歌することによって、逆に自分が激励されてきたということでしょう。

小市民的になるかも知れないけど、僕は、美を全面的に展開するという方向には、自分の資質として向かわないだろうと思う。どう生きるかっていうのは、けっこう大変ですよ。もちろん、美しいものとか、激しいものに憧れはするけど、自分の全生活を犠牲にして文学、美に奉仕するという風にはなれないんじゃないかな。これは、人の資質だから、しょうがないと思いますね。最後の最後までは文学を信じていないところが、僕の歌の弱さにどこか出ちゃう。でもみんなが本当にそこまで突き詰めているか、というと、そうでもないから、ほどほどの勝負はできるかなって気もするけどね。

—— 対象をめぐりの小世界に絞ったことに伴う方法論は。

小高 ありますね。さっきも言ったように、僕の中には鳥瞰図があつて、どういうところでやると、歌がある程度のレベルまでいくんじゃないか、この根拠だったら自分が自身を持って発言できるとか、そういう見通しはあります。

家族詠、家族詠って言うけれど、これは一種の方法であつて、自分を表現するときの、一番ふさわしい場所だということです。家族詠は本質ではなく、あくまで方法です。

長いながい「中年」という時期

—— 『太郎坂』には、タイトルもそうですが、坂がしきりに出てきます。

小高 僕は東京の下町生まれですので、東京には親しみを持っています。東京には坂が多くて、それに坂の名前はみんな面白い。鱧鮓坂、菊坂、炭団坂とかね。坂というのは、僕にとって東京らしさなんです。

—— それから、人生を坂に喩えた歌も多い。たとえば「われはいま坂のいずくやいうまでもなくのぼるより下る途中の」とか。

小高 三十三から始めているので、大学時代から歌を作っている同世代のひとに比べると、僕は十年は完全に遅れているわけです。ですから、実感としてはどうしても、中年という意識が最初から強くあつた。それからほとんど、年齢意識というのは強くなってきました。中年というのは、高齢化社会になると非常に時間が長くなる。言ってみれば、斉藤さん（三十二歳）くらいのところから六十くらいまで中年なんです。老年へのモラトリアム、というかな。ゴムが伸びたような長い時間という感じが強くあつて、それを自覚的

に歌に取り入れてるわけです。

でも、坂というのは、すごく俗っぽい喩えなんです。こんなの作ると俗だな、って思う。だから、それを逆手にとる以外にない。

読み手がそう思っちゃうのを先に言ってしまう。そういう意識的な作り方って、はたして良いのかどうか分らないけれどね。だから、自然発生的に、自分の情に対して何の障害もなくストレートに向かつて、短歌を作っている人は本当の歌詠みなんだと思う。僕らは、そこに操作が介在する。自然の感情イコール文学の表現にはならない意識っていうのがある。これが歌なのか、と言われると、歌じゃないかも、という気もする。

—— 自然発生しないのに、なぜ歌をつくらなければいけないのか、っていうのもある。

小高 そうそう。それ本質的な問題。それから、なんで五七五七七なのか、ね。なぜ、言い尽くせたとか、言い足りないという気分になるのか。微妙な問題だね。微妙だけど、読み手も作り手も一瞬のうちに分かっちゃう。そこがおもしろい。

### 「歌の前の平等」と批評

—— 色々なところから指摘されることですが、歌壇とか、結社の問題については。

小高 歌の面白いところというのは、頂点には斎藤茂吉みたいな人がいて、底辺には鉛筆なめなめ新聞に投稿するっていう人がいて、全部つながっているでしょう。小説なんかは、切れるわけ。専門の作者と読者とが。歌は作る人イコール読む人だから、それは近代文学として遅れている形態だとか、結社は封建的である、とか言わ

れたりしますけど、ある部分ではその通りでしょう。でも、もう一方では、読者と専門作者が分かれるのが、むしろ異常なのであって、読む人イコール作る人という回覧雑誌的なものが、基本的に言うところの文学の姿なのかもしれない。

短歌の現実には下らないところも一杯ある。けれども、短歌には、歌の前に誰もが平等である、という良さが間違いなくある。たとえば馬場さんの歌が歌会に出たときクソミソに言われることだってあるわけですよ。小説にはそれが無い。売れる売れないという尺度はあるけどね。

小笠原賢二さん達が短歌について色んなことを言う。下らないところも指摘する。その通りの部分もあります。でも、片一方では、近代文学以前みたいな言い方をされると、それはおかしい、と思う。結社についても同じようによく言われる。確かに悪い面もある。それは認める。けれども、結社を否定したからといって、文学がそれによって生き残るというわけではないだろう、と僕はよく反論しているんです。でも、結社も、歌の前に平等性がない場合には、やめた方がいいでしょう。歌の前の平等があるから、結社は成り立つのだと思います。

—— ということは、批評が非常に重要になります。

小高 短歌の世界には、鑑賞はあるけど、批評が少なくなってます。批評って何かというと、客観的な条件を出して、これこれこうだから駄目だとか、こういう方向にしなければ、非常にフェアプレーなわけ。フェアプレーの發揮できる場が必要だけど、短歌にはそれが少ない。だから僕自身、批評をやらなければいけない。本当のところの批評意識がもって出ないといけないと思う。育

藤さんたちの世代、もっと書くべきですよ。歌壇でもっとも必要なのは、批評だと思う。

—— これからの仕事と、注目している歌人は。

小高 宮城二さんの書き下ろしをしようと思つてます。近藤芳美さんを書いていきますので、今度は宮さんを書きたいと思つて。注目するというより、現在のテーマですね。同世代では高野公彦さんや、小池光さんの仕事が気になるなあ。それから、困るのは、岡井隆さんや馬場さん、あの世代がみな元氣すぎることに。エネルギッシュに先駆けていくから、刺激されるのと同時に、こっちはついていくのに大変だな、って。

最近、とくに凄いて思うのは、辰巳泰子さん。一番いいんじゃないかな。それから水原紫苑さんもね。

—— 個性の会に対して、なにか一言ありませんか。

小高 よく雑誌を読んでいます。男の人に頑張れと言いたいですね。かりんもそうだから、自戒もこめて、というところでしょうか。

◇ ◇ ◇

「ビール飲みましようよ、もう」。小高さんのこの言葉で、インタビューは終わったが、彼はこのインタビューのあいだ終始、歌人としての自分を、物足りないやつ、というように見ていることを語っていた。短歌が、極論すれば、一種の憑依（ひょうい）現象であるとするならば、小高賢の資質は歌人のそれではないのかも知れない。しかし、これはやはり極論であり、現実離れた比喩である。もし、短歌がそのようなものではないなら、歌人とはみな狂人でなければならぬ。読者という存在（これには作者自身も含む）を想定しながら、すなわち批評の働きを加えながら、己れの精神のなかに生

まれる不可思議な原石を磨きあげていくプロセス、それこそが短歌の本質であり醍醐味であろう。そしておそらく、彼はその批評意識が、他に際だって強いだけなのである。

最後に昨年の夏に発行された「現代短歌・雁」の特集「小高賢」から、彼の本質をおそらく見事に言い当てた文章を引用しよう。「同世代の歌人たち」という評論の中で福島泰樹を論じた小高に対して、山田富士郎が次のように言っている一文である。「小高のような考え方は歌人にはきわめて珍しいだろう。冷静な戦略や認識よりも敗北の美化やルサンチマンへの共感に赴きやすいのが歌人だからだ。私も全く例外ではなく、福島の感傷性、浪漫性に心引かれるのだけれど、小高の認識の冷徹さも高く評価したい。」

一族がレンズにならぶ墓石のかたわらに立つ母を囲みて

どうしても詩人になれぬ生卵割りて九月の食卓に座す

会議終わりしあとの目にしむ夏空は壮年のランボー行きしアフリカ

鯉<sup>うどん</sup>峠坂夕べにくだりほのあかき月に一人の女をおもえる

雨にうたれ戻りし居間の父という場所に座れば父になりゆく

鷗外の口ひげにみる不機嫌な明治の家長はわれらにとおき

不惑なる坂の半ばのほのぐらさおりおりわれを訪いくる芭蕉

うちそろい夕餉にむかう細部まで素朴絵画のごとき家族よ

わが論の末尾の近くあかかかと鋭きいっぽんの鷹の爪おく

◇ ◇ ◇

おわび

7月号の鵜飼信光「短歌で童話を書く」は、昨年12月7日付「神戸新聞」文化欄からの転載です。スペースの都合で転載時に明記できませんでした。そのことをおことわりしておきます。